慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	聖アレクシウスの妻
Sub Title	L'Epouse de Saint Alexis
Author	松原, 秀一(Matsubara, Hideichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.83- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖アレクシウスの妻

松原秀一

「聖アレクシウス伝」は仏文学史上最も古い文学作品の一つであり、その価値も又高い事は衆目の一致して認める所である。最近の中世文学の技法研究の進展はこの作品にヴェルギリウスの影響、もしくはカロリンガラテン敍事詩の技法の反映を見る計りか、従来は文学的意図を見られることのなかった文書にも修辞学的構造を発見し、「ストラスブールの誓約」の中にすら修辞学的な創造を見る程であるが、その中に於ても「聖女エウラリア伝」「聖レオデガリウス伝」「クレルモン写本のキリスト受難」等の紀元千年以前の作品から、千四拾年と推定される「聖アレクシウス伝」への移行には質的な飛躍があると云えよう。この作品は、その六二五行と云う長さの点でも二四行の Sainte Eulalie 伝、二四〇行の Saint Léger 伝等それ以前の俗語の聖者伝に対して、はっきり差を示している。聖者伝は Fortunatus によるガリアの守護聖人 St Martin 伝以来、絶えまなく書かれ、九世紀に入って martyrologes の普及により盛んとなり殉教聖人のみならず至福者伝も含む所謂 légendiers も作られるようになるが、この極めて早く俗語でも拡まった聖アレクシウス伝は、初期の聖者伝中でも迫害者も悪魔も拷問も超自然的奇蹟も物語らぬ点からも独特の位置を占める。但し、奇蹟の不在は中世フランス語による聖アレクシウス伝を伝える十四写本中、最も古い型を伝えている十二世紀の四写本（一つは十三世紀）に依るものであっ

て、同じラテン語の典拠により乍らも、このシリヤ起源の聖人伝は時代の変遷に伴って、異同を示している。

この聖者伝を伝える中世フランス語の写本は以下の十四である。

略号	所在地整理番号	備考
L	(Lamspringe 写本)	十二世紀。現在ハノーヴァ、ヒルデスハイム聖ゴドアルド教会蔵。十七世紀にイギリスの修道僧によってランブスプリンゲン修道院に斉らされた。
A	(Ashburnham 写本)	十二世紀。アシュバーナム卿旧蔵。現在パリ国立図書館 (N. acg. 4503)
P	(Paris, Bibliothèque Nationale. f. f. 19525)	十三世紀。旧聖ジェルマン修道院写本 1856。
V	(Vatican, Codex vat. lat. 5534)	十二世紀。1925年Mercati によって発見された。
S	(Paris, B. N. f. f. 12471)	旧 Supplément 632 番写本。
Ma	(Paris. B. N. f. f. 1553)	十三—十四世紀脚韻 S の伝承を脚韻に改作している。
Mb	(Carlisle 写本)	十三世紀。同右
Qa	(Paris, B. N. f. f. 1555)	十五世紀初頭。十二音綴。四行単韻 (以下六写本共に)。
Qb	(Paris, B. N. f. f. 1661, anc. 7652)	十五世紀末。
Qc	(Paris, B. N. f. f. 1881, anc. 7883, 3, Delamarre 463)	十六世紀。
Qd	(Paris, B. N. f. f. 15127, anc, supplément fr. 521)	アレクシウス伝を二篇伝える。
Qe	(Besançon 図書館蔵)	十五世紀。
Qf	(Arras 図書館 766 番写本)	旧聖 Waast 修道院蔵。一四七二年に書かれたもの。
Qp	(Pannier 氏所蔵)	一四七〇—七一年に書かれたもの。

この他に Manchester 断片と呼ばれるものが John Rylands library に French 6 の整理番号で伝わっていて、これは P 写本と同系列とされている。

広く校訂版で親しまれている「聖アレクシウス伝」は上記十四写本中の L. A. V. P の四写本に残るもので古くはフランスに初めて Lachmann の校訂法を伝え長く模範とされた G. Paris-Pannier の校訂から G. Paris による C. F. M. A 版、Meunier 版、Storey 版（一九四三年版と一九五八年 Blackwell's French texts 1958³）までの諸版によって広く識られている。S 写本は Paris-Pannier によって Rédaction interpolée du XIIe siècle と云われるもので筋にかなりの増補が見られる。二つの M 写本は半階音（assonance）を脚韻に書き直したもので Paris-Pannier によって Rédaction rimée du XIIIe siècle として公刊された。七つの Q 写本は Pannier の手で校訂版が作られ一八八七年に上記の諸校訂と共に一冊本として公刊され、そこでは Rédaction en quatrains alexandrins monorimes du XIVe siècle と云われる。尚、十三世紀にジェノヴァの司教 Jacobus a Voragine によって書かれ、「レゲンダ・アウレア」の名で広く識られている Legenda Sanctorum もこの話を伝え Beauvais の Vincentius の Speculum historiale にも収録されている。これ等から又俗語で韻文の聖アレクシウス伝が書かれている。十四世紀の Le Tombel de Chartrose 中の八音綴で書かれた九九二行の聖アレクシウス伝はこの後者の系列のものである。

聖アレクシウス伝説が広く民衆に好まれた事はワルド派を興し異端として追求されたリヨンの商人 Pierre de Vaux (Petrus Valdus) が或日、聖アレクシウス伝が語られるのを聴いて感泣したことが、家業を捨て「リヨンの貧者」として伝導者となった契機であるとする伝承からも窺われるが、近世にもこの聖者伝が語られていた事は La Vie de St Alexis 校訂者の一人 J. M. Meunier 師も幼時の想出として記している。これ程広く親しまれ育くまれたこの聖者伝は、しかし、或る偶然によって西欧に斉らされ、しかも細かく見るならば、西欧には異質的な側面すら持っているように思われるので、まずこの伝説の経路を辿ってみたい。

一　伝説の西漸

この聖者伝の最古の型を伝えるのは紀元六世紀前半に書かれたと推定されるシリア語の写本であり西欧では British Museum に写本が三部所蔵されている。メソポタミアのエデッサの町に司教 Rabula（四一二—四三五）の時代に住んでいた無名の聖者の伝記であって、シリア語による八写本の比較研究をした A. Amiaud は恐らく実話であろうとする。その内容は次の如きものである。

「富裕に生れ富への嫌悪を貧への愛に変えた聖者の生涯を語ろう。聖者は清貧と無欲の使徒であり結婚からも色欲からも身を守り、神の為にはアブラハムの如く喜々と家を捨てた。その完徳は言葉では云い尽せない。

聖者の両親はローマの誉れ高き家柄であった。長く嗣子を得なかったが神に祈り男子を得た。この世の栄誉は生れると豊かに子供に授けられたが、この空しき飾りは両親にしか意味を持たなかった。学齢になると大勢の召使に伝ずかれ学校に通ったがこの世の空しき知識に惹かれる事はなかった。両親は彼が神の選び給いし具である事を覚らず、彼の愚直を悲しんだ。彼が適齢となると両親は妻を選び、町中を華燭の宴に招いたが、花嫁の到着を前に花婿は付添人を説き伏せ港に向った。付添いに馬を託すと聖者はシリアに向う船にこっそり乗り込み、エデッサの町に着いた。ここで歿するまで彼は乞食として暮し日中は教会で祈り、日のある間は断食をし、暮方に教会の入口で僅かな喜捨を得ると祈にふけった。必要以上の喜捨を受ける事があれば人に施した。夜は腕を十字に組み壁か柱に凭って祈った。一方、付添は彼の帰らぬのに不審を懐き尋ねて出奔を知り、両親も驚いて使を四方に送って探させ、その一人はエデッサまで来て乞食の姿の聖者を見たが気付く事はなかった。

彼の毎夜の勤行は教会の門番の気付く所となり門番は彼を問いつめ秘密を守る約束で彼の来歴を知った。長い年月が経ち聖者は病み柱の間に伏していた。彼の姿が見えないので門番は怪しんで探しに来て彼を施療院に入れた。彼が歿するや施療院の人は遺体を外人の共同墓地に埋葬した。これを知った門番は司教の所に聖者の来歴を明かしに行き、話を聴いて感銘を受けた司教と墓地に向い墓を調べたが衣を残すのみで聖者の身体は消え失せていた」

この伝記は Edessa で語られ六世紀から九世紀の間にビザンチン世界に拡まっていった。この頃のギリシャ語による伝記が四写本に遺されている。所がコンスタンティノープルには既に内容の似た Saint Jean le Calybite の伝記があり、二つの聖者伝は混淆をおこすのである。Edessa の聖者伝に云うローマは東ローマ即ちコンスタンティノープルを指すものと思われるが、この「小屋住み（καλυβη）の」聖ヨハネは西のローマの人であった。その伝説の概略は次の如くである。

「聖ヨハネはローマの貴族であった。両親が或日コンスタンティノープルからの巡礼僧に宿を貸した。この僧の質素な生活を見て感銘を受けた聖者は僧の帰国に当って同行を願いコンスタンティノープルで修道院に入った。暫らくして父の祝福を得ずに家を出て死を迎える不孝を難じる天からの声を聴き再びローマに戻り乞食の姿で父に出会い息子と気付かれず父の家の傍に小屋を貰い受け神の信仰一筋に暮した。死を前に身分を明かしたが、この現世を願わぬ聖人の行いは崇拝の的となり墓の上には教会が建てられた」

この二つの伝記はコンスタンティノープルで一つの話となりギリシャ語で拡まり再びシリヤ語に訳されエデッサまで戻って来るのであるが、このギリシャ語化の際に Alexis と両親の名が定まるのである。内容は西欧に伝わっている聖アレクシウス伝と殆等しい。

「皇帝アルカディウスとホノリウスの時ローマに Euphémianus と云う貴族が居て妻を Aglae と云った。長く嗣子が無かったが神に祈って男子を得 Alexius と名付けた。適齢となり父は王の娘を選び結婚させた。式も終り二人が寝室に残されると Alexius は妻の許から家を出シリアに向い Edessa に留った。十七年乞食になり信心を続けたが、エデッサで信仰を蒐めている聖母像の「神の僕を探せ」のお告げから人々に求められるのを避けローマに戻り父の家に身分を知られずに住むことになった。十七年を貧者として過し歿した。その時神の声が「神の僕を求めローマの為に祈らしめよ」と命じた。探索が難行し再び神の声が Euphemianus の家を示したので手に遺書を握って死んでいる Alexius が発見され、その遺書によって生涯と神への献身が知られた。両親と妻の嘆きの裡に遺体は聖ペテロ寺院に葬られた」

ここに成立した Alexius 伝は東ローマ帝国内には広く行きわたったが十世紀になるまで全くラテン世界には知られなかった。或る偶然が西欧にこれを斉らし急速に拡めることとなる。ダマスクスの大司教 Sergios が政敵に追われ九七七年にローマに難を避けた。時の法王 Benedictus 七世は聖ボニファティウス教会に彼を住まわせ、この東方の大司教の周りに僧侶が集まりその東方風の簡素で戒律の厳しい生活と信心で人目を惹くようになった。後にこの教会の修道院はハンガリー、チェコ、ポーランドへの伝道の中心となる。

この大司教とお付のギリシヤの僧侶達はローマに来てローマの人々がローマの（実際はコンスタンティノープルの）聖人 Alexius を識らずにいるのを意外に思いローマの人々にこの聖者伝を伝え、ここにラテン語によって Alexius 伝が書かれることとなる。ラテン語による聖アレクシウス伝では聖ペテロ寺院は聖ボニファティウス寺院となり法王は Innoncentius となり皇帝も Honorius と Arcadius とされた。この聖者伝は短時間のうちにローマに拡まり九八七年には聖アレクシウスの遺体が教会内のどこかに埋葬されるものとして修道院に寄進があった記録があり、一〇三四年一〇三五年にも修道院の守護聖人聖アレクシウスを銘記する墓碑銘が残っている。後に十三世紀に入ると聖ペテロ寺院と聖ボニファティウス教会とで聖人の遺体を廻って争いが起った。ギリシヤ伝本によって聖ペトロ寺院は聖アレクシウスは聖ペテロ寺院に眠ると主張したのであった。Euphemianus の家も発見され今に伝わる程である。

フランス語訳は一〇四〇年と推定されるがこれは大司教のローマ到着の九七七年から僅か六〇年程後であり伝播は極めて早いと云わざるを得ない。

二　伝説の変質

聖アレクシウス伝の各々の伝承は多くの異同を示し、その全体を扱うことは至難である。ラテン語文を基とした十一世紀のフランス語によるものもその原型と多くの差を示し、特に description に於て著るしいがこの技法の問題は他日に譲ってここでは西欧化の面を取上げたい。この伝説に超自然的奇蹟が語られず悪魔も登場しないことは前にも述べたが、他の特徴として聖 Alexis の性格があげられよう。実際この聖者は東方的聖者であって伝説の変化はこれを西欧の聴者に受容させようとする所からおこるとまで云いうる程であ

る。シリアの伝承では聖者は学業に関心を示さず両親を心配させる程であった。Amiaud の仏訳に依れば“non seulement il ne faisait nulle attention à ces choses passagères qui s'évanouissent, c'était même à l'opposé qu'allaient ses visées, en sorte qu'il s'accoutumait à l'humilité, tout en se consacrant en paix à l'étude ; et bien que beaucoup d'enfants de son âge cherchassent à le faire faiblir dans sa poursuite opiniâtre d'une grande science, il ne se départait pas de sa persévérance. Or les parents de l'enfant, ne comprenant pas qu'il était un instrument choisi par Dieu, se prirent à s'affliger et à se lamenter, à la pensée qu'il était simple et inhabile à la vie de ce monde.”と云う。東方の修道生活と西方の修道生活を区別する特徴はこの「学問」に対する態度であって、この“Primat des Simples”は東方的なものである。西欧の修道制度は東方からの輸入であるが東方の孤独の苦行よりも研学に重きを置いている。聖アウグスティヌスは三九六年ヒッポに修道院を開き、北アフリカに修道制度を斉らしたがその Reglae は図書室の存在を前提としている。モンテ・カシーノ修道院規定には四旬節までと四旬節間の読書を規定して A kalendis autem Octobris usque caput Quadragesimae, usque in horam secundam plenam lectioni vacent ; (...) Post refectionem autem vacent lectionibus suis aut psalmis. (...) In quibus diebus Quadragesimae accipiant omnes singulos codices de bibliotheca quos perordinem ex integro legant ; qui codices in caput Quadragesimae dandi sunt. と定め日曜も研学にあてられる Dominico item die lectioni vacent omnes, 筆記具は修道僧に当然与えられる物であった。Dentur ab abbate omnia quae sunt necessaria : id est, (...) cultellus, graphium, tabulae (...)

シリアの伝記では神の愛でる「おろか者」であった聖者はラテン語では et ita Deo largiente edoctus est, ut in omnibus philosophiae et maxime spiritualibus floret studiis と賢こくなりフランス語もこれに従って Tant aprist letres que bien en fut garnit (1. 34) とし、S写本もこれと等しいがM写本（十三世紀押韻詩）になると敷衍され、学芸（artes）を修めた秀でた智力の人となる。

56 Puis si le fisent a l'escole mener,

Et l'escriture enseignier et mostrer.

En poi de tens sot bien lire et canter,

Et en latin mont sagement parler,

60 Et une loi gentement visiter.

Et kant li enfes fut des ars bien senés,

De mout ciers dras s'est ricement parés:

Droit a le cort le roi en est alés.

シリヤの伝記では聖 Alexis は自分の妻の来る前に家を捨てるがラテン語と西欧の伝記では主に於て結ばれ妻に伝道し指輪と剣の束を与えて家を後にしている。coepit nobilissimus juvenis et in Christo sapientissimus instruere sponsam suam et plura ei sacramenta disserere, deinde tradidit ei annulum suum aureum et rendam, (...) dixitque ei "Suscipe haec et conserva, usque dum Domino placuerit, et Dominus sit inter nos. 家出後のエデッサでの夜間の苦行は姿を消し、単に permansit in sancta conversatione et vitae austeritate per decem et septem annos incognitus. とのみ記される。

聖 Alexis はローマに戻り父と対面し乍ら気付かれず母、妻の姿も見て十七年を暮すが心を動かされない。これは神に全身全霊を捧げた姿で impassibilité を聖人の目標とするものであろう。この考へはギリシャ語伝本にもラテン語の伝記にもないが、フランス語の H. L. V. S 写本には言明してある。

241 Soventes feiz lur veit grant duel mener

E de lur oilz mult tendrement plurer,

E tut pur lui, unces nient pur eil.

Danz Alezis le met el consirrer;

245 Ne l'en est rien, si'st a Deu aturnet.

同じ写本で母は息子の遺体を前に無情さを責めて嘆く。

E de ta medra que n'aveies mercit?
Purquem vedeies desirrer a murir,
440 Co'st grant merveile que pietét ne t'en prist.
……
446 Filz Alexis, mult oïs dur curage,
Cum avilas tut tun gentil linage!
Set a mei sole vels une feiz parlasses,
Ta lasse medre, si la (re)confortasses,
450 Ki si'st dolente. Cher fiz, bor i alasses!

S写本ではローマの道路上の再会には母も父と倶にあることになるが、両親の悲歎の様を見て聖 Alexis は心を動かされる。そしてそれを表わすまいと努力したのである。

Com il les voit plourer si tenremant,
748 Iriés en est, mais il n'en fait samblant,
Crient et redoute ne l'voisent ravisant.
De tout a mis en Jesu son talent.

M写本では聖 Alexis は父に身分を気付かれぬようにギリシャ語で話しかけようと考える。

Or se commenche li ber a porpenser
620 K'a Rome ira sen_pére araisoner
Et en_grigois in tel_wise parler

K'a sen romanc nel pora aviser,

両親の悲歎を見て心を動かされまいと同じく努力をする。

Kant il les vit si aler sospirant,

Iriès en est, mais n'en fait nul semblant,

Car il cremit k'il ne le conoissant:

730 De tot en tot a a Diu sen talant.

"Jesu, dist il, ki mains en Oriant,

Kes amistiés est de mére a enfant!

Chis trés grans dues k'il vont por moi menant

734 Or m'est ligiers, si l'troverai pesant:

Au grant juise me revenra devant.

Ajue, Dius, con en sont desirant!

S'or me voloie faire a iaus conoissant,

738 Tel goie aroient onkes n'orent si grant."

S写本では聖アレクシウスが肉親の姿を目にして感動する項は L. H. V と同じく

772 N'a soig que l'voie si est a Diu tornés

であるが、この後で父、母、妻と直接対話をするように筋が変り M、Q の伝承もそれを受継ぐ。M写本では両親と妻を見て衝撃をうける。

Il les eswarde, et si s'en fait si mut

Ke s'on l'avoit a un grant pel batut :

780 A Diu se tient par itéle viertut

Ke lui ne caut de parent ne de drut.

神への信仰でそれを乗り越えるのである。母はこの聖者を息子 Alexis と似ていると気付き話をしに赴く。

S (v. 852-855)

Quant je l'regart, membre moi de mon fil ;

Pour un petit ne l'resemble del vis.

Lors plour des oels, ne m'en puis astenir :

Çou est li dels dont m'estora morir."

M. (v. 871-873)

Quant jou le voi moi sovient d'Alexis :

Por un petit ne l'resemble dou vis ;

Li dues de li m'ochira ains mes dis."

母に名を尋ねられ（Chétien と変名を名乗った）Alexis は母の足を抱き神の名を呼ぶ。

S (v. 871-882)

Il s'abaisssa ; as piés se li cai ;

Puis le baisa, se li cria merci.

" Sire ", dist ele, " Quel pardon m'avés quis ? "

" Sire ", dist ele " quel pardon me querés ? "

" Pour mon malaige quic jou estre encombrés."

" Sire ", dist ele, " tout vous soit pardonnés."

M. (v. 877-896)

Tanr s'esforcha ke le piet li a pris,

Si li cria mierchit li Diu amis.

" Sire, dist ele " de col m'ales proiant ?

" Ma biele dame, jou l'ferai entendant :

Kant jou premiers vinc en te cort errant,

Si te proiai l'hostel por Diu le grant
Et por l'amor Alexis ten enfant :
Ainc puis chel di n'eus le cuer goiant,
Ne ne venis par devant moi passant
Se me veisses n'en alasses plorant.
Dou ruiste duel ke vois ramentevant
Meffais en sui, jou l'sai a eschiant.
Pries est me fins, car mout vois agrevant ;
Si l'me pardone por l'amor Diu le grant."
Tant a li sire et proiiet et plorat
K'eles li ont werpit et pardonet
Ire et descorde et male volentet.
Atant s'en tornent, ke n'i ont plus parlet.
Et il remest tos sos sos le degret.
Dis et siet ans i a si convierset.
Et la pucele les a bien esgardés,
Se li pardonne, ele fait autretel.
Ele s'en tourne, cil est moult liés remés.
Iluec converse issi dis et set ans.

Impassible であった聖者は肉親を前に涙を流すように変身する。S写本に残っている母の Com m'eus enhaïe ! (v. 1198) と云う息子の非情さへの恨みはM、Q写本群には現われない。時代と共に大きく浮かび上って来るのは、十一世紀伝本では聖者との対話は記されず出奔伝の嘆きと遺体の前での嘆きの言葉のみが、それも六二五行中で二八行しか記されていない置去られた妻の姿である。

III Lesigne

フランス語による聖 Alexis 伝は母 Aglae の名も妻の名も明かさぬが、ただS写本のみが La pucele iert de moult grant parenté Fille a un conte de Rome la cité ; Lesigne ot non, ses péres Signourés ; (v. 89-91. cf. 839) と妻の名と妻の父の名を伝える。但しS写本は母 Aglae を Fille Flourent, o non Boine Eurée (v. 56) と変えているので Lesigne の名も思いつきであろう。十二世紀の伝本では結婚の夜聖者の決心に無言の妻の言葉として夫の出発後、悲嘆の母に対して(v. 148-150)と聖者の遺体の前での嘆き(v. 468-495)と二八行の言葉を伝えるのみだが、S写本とM写本では家出をとめようと自分を見捨てないように

S (v. 166-173)	M (141-147)
Dist la pucele : "Or sui molt esgarée ;	Dist li puchiele : "Or sui mout eswarée ;
Mainne me la dunt tu m'as amenée.	La m'en reporte dont tu m'as aportée.
	Ke quierras ore en estraigne contrée ?
Pr coi me lais ? Ja m'as tu espousée.	Por coi me lais kant tu m'as esposée ?
Que querras ore en estrange contrée ?	
Que porai dire ton pére ne ta mére ?	
Sempres m'aront de lor terre jetée.	Demain serai de te cambre jetée,
Puis m'en irai com autre asoignentée.	Puis m'en irai comme femme eswarée :
Tel honte arai jamais n'iere hounerée."	Tel honte arai jamais n'ierc honoréé."

と訴える。聖 Alexis の決心は堅く言葉を尽して説得し、妻は泣いて諦らめる。

S (207-209)

Ot le la bele, ne cesse de plorer :

" Sire," fait ele, " or te commant a Dé

Quant autrement ne te puis retorner."

M (302-310)

Ot le li biele, si laissa le plorer.

" France Puchiele, por l'amor Diu, Mierchit !

Lai m'ent aler, car tuit sont endormit."

" Va t'ent a Diu," li biele respondit :

" Chius ert dolens ki toi engenuit,

Si iert li mére ki soef te norit

Et jou meisme ki l'avoie a marit ;

Or verrai plait a grant duel departir.

Or t'en va, sire kant ne te puis tenir.

聖者は悦び折半した指輪を一年以内に送るから受取っても自分が戻らなかったら他に嫁すように伝える。妻はこれ程に誠まれたかと嘆く。De cest anel que jou ai departi Ceste moitié qu'en aumoniére ai ci, D'ui en un an le renvoierai ci Par un mesaige u moi se jou sui vis. Se ne revieng, puis pues prendre mari ; Savoir porras que alés sui a fin. " Ot le la bele ; si a jeté un cri : Quide sa mére que il juast a li. " Bele," dist il, " vous me volés hounir." Par Diu ", dist ele," " aiés de moi merci." "Sire ", dist ele, " moult ai mon cuer mari ; Se moi en poise pour coi me as plus vil ? " " Certes nen ai ", çou dit sains Alessis, " Ains vous aim plus que riens que Dius fesist, (...) (S 写本 vv. 215-228)

妻と聖者の間には対話が成立している。対話は三一八行まで続き、妻は父母の嘆きを想わせ帰国の日を尋ね同行を懇願する。

S (vv. 307-315)

S'a ten consel le peusse trouver,

M (311-319)

S'en ten conseil le pooie trover

Qu'ensamble toi me laissaisses, aler,
Ja me veroies gentement conreer,
Tondre mes crins, un capel afubler,
Et prendre escerpe et un bourdon ferré ;
Servirai toi de tes dras relaver,
Ne ja luxure ne m'verras demener,
Ne adultére, ne autre putée."
" Non ferai, bele, ains te commant a Dé,
Le glorious qui pour fu penés
En sainte crois, pour son pule sauver."

K'ensemble od toi m'en laissasses aler,
Ja me verroies gentement apriester,
Tondre mes crins et wimples afubler,
Et prendre eskerpe et bordon acater :
Toi siervirai de tes dras relaver,
En se ke ja ne te quier adeser
Ne carnelment dalés toi convierser."
" Non ferai, biele, Jesus te puist sauver !
Ains te comant a le virgene Marie,
Ke des diables te port tel warandie
Ke mais ne puisses iestre par iaus honie."

Q (v. 126-136)

" Sire, dit la pucelle, car me lessiez aller :
S,il vous plest, avec vous vouray mon cors laser,
Ne ja ne quer a vous charnelment adezer.
Tondre feray mes tresses, sire, s'il vous est bon ;
Pour vostre amour prenray l'escherpe et le bourdon :

Vos dras vous laveray quant en sera sesson.

Alexis respondi doucement a bas son:

"Ma suer, vous demourrez pour vostre onneur garder:

Je vorai la penance pour nous deus endurer.

Jhesu Crist vous doint grace de vostre ame sauver."

十一世紀写本では二八行が記されるのみであった Lesigne は、S写本以後は主役の一人となる。シリア語写本では結婚式を挙げる前に家出をした聖者はラテン語の伝記では聖ボニファティウス寺院で神の前に結ばれているのである Impositae sunt eis singlae coronae in templo sancti Bonifacii martyris per manus honoratissimorum sacerdotum et sic cum gaudio et laetitia laetum duxerunt diem. 結婚は秘跡の一つであって勿論それ自身罪ではなく、又神の前に結ばれた Sacramentum は人がそれを解くことは許されない。指輪はそれを象徴している。十一世紀写本では剣の束と共に妻に渡された指輪は (Pois li cumandet les renges s'espethe Et un anel. v. 72-3) 十二世紀のS写本では剣で半分に断たれ妻に一半が与えられ (Prist un anel dont il l'ot espousée, Dous pars en fist al trencant de l'espée: L'une partie l'en a recoumandée, Se li pria qu'ele soit bien gardée; S'on li demande, k'ele soit aprestée: Emsamble lui en a l'autre portée, Que se jamais revient a sa contrée Et il li moustre les ensegnes prouvées, Que'l recounoisse entre li et sa mére. (S. 157～164) 他日の証拠とされる。聖人は遺書の中にこの指輪の一半を封じこんでいる。

S (v. 1133-1139)	M (v. 1138-1143)
Et la moitié de l'anel ont trouvée,	Et le moitiet de l'aniel ont trovée
Dedans la cartre trés bien envolepée,	Ens en le cartre trés bien envolepée,
Dont la moitié li ot recommandée.	Dont le moitiet li ot recomandée;
Ele l'ot bien estoie et gardée;	

Il (Pape) li demande : ele l'a aprestée :
Il les assemble, si se sont acordées.
Dist l'apostoiles : " Cest ensegne est prouvée."

On li demande, ele l'a aportée :
L'une part a a l'autre rajostée
Et nostre sire l'a trés bien rasoudée.

Q (v. 695–701)

Quant departi de lie son anel li coupa :
Vez en ci la moitié ! " La pucele cria
Quant ces moz entendi : " Lasse ! mal eürée !
J'ay bien l'autre moitié trente et quatre ans gardée."
Mout dolente l'ataint. Tel vertu la journée
Fist Dieu que l'une pieche est a l'autre soudée,
Si bien qu'il n'i parut c'onques fust departis.

M′ Q写本群ではこのように指輪は右顕を起し合わせ目は接合されわからなくなってしまう。聖者の父は遺体の手にしている遺書を手にとろうとして取る事が出来ない。Euphemianus autem (...) invenit eum jam defunctum (...) habebatque in manu brevem scripturam et voluit eam ab eo accipere et non valuit. 皇帝と法王は祈ってこれを手にすることが出来る (L. H. V 写本第七一節一七五節)。十二世紀のS写本では妻は聖者の臨終に立会い話をする。

S (v. 980–996)

Ja iert en transe quant la pucele vint.
Adont l'esgarde, si le vit empalir.
" Sire ", dist ele, " moult vous torble li vis "

M (v. 1016–1022)

Et li espose cuert a saint Alexis :
" Sire, fait ele, " mout vos torble li vis."

"Bele", dist il, "car près sui de ma fin.
Grand paour ai, car près sui de morir.
Car or voi çou que onques mais ne vi:

Voi quantes mains me voelent recuellir;

Hui perirai se Dius ne me garist.

Pense del cors qu'il soit ensevelis;
L'ame ara çou que ele a deservi."
Il li a dit: "Pour amour Diu, pucele,
Ma fin aproce, ne viverai mais gaires.
Sains Bonifaces, que on martire apele,
Porter m'i fai, se m'i fai metre en tere;
Quant tu morras tu i vauroies estre."
"Au congié Diu, sire" dist la pucele.

"Chiertes, puchiele, or m'aproce me fins.
Grant paor ai por chou, le te plevis.:

Vois ke chi a de ches noirs anemis;

Dolent chelui ki en lor mains ert mis!

Diu en ai jou de mes dos piés requis.

聖者はエルサレム巡礼より持帰った palmes を墓に植えることを頼み、来歴を問い尋す妻に答える事なく息を引取ってしまう。S写本では死を父に告げるのは従者であるがM写本では聖者の死を告げに赴くのは妻である。聖者の遺言についても同様に変化が認められる。遺書はS写本からは妻に宛てられるのであって、神に祈って法王が手紙を手にとると手紙は妻の胸に舞い込むので法王は自分が神

に嫌われているかと怖れる。 Li apostoiles mist sa main a la cartre; Sains Alessins la soie li alasque, Cil le reçut ki ert de Rome pape: Quant il le tint si le moustra as autres. Illuec fist Dieus un glorious miracle, Que de sa main s'en ala droit la cartre: A la pucele s'en ala a la place, Ens en son sain en son bliaut de paile: Emprés sa car ot vestue la haire, Doucement sert le glorious mirable; Ele ne veut c'om ne feme ne l'sace; Sains Innocens esperdi son coraige; Si ot vergoigne des houmes de la place. Et paour a ke Damedius ne l'hace. Sains Innocens quant ot la cartre overte Et vit les letres que li sains hom ot fètes, Ains li escarpe que le peust espialre: Tout droit en va el sain de la pucele, Sous son bliaut, entre ses deux mameles, U ele pleure mals et les soufraites Que li sains hom sour le degré a traites. Ne si ne sait c'a lui eust afaire Mais perdre en crient le glorious celeste. (...) 法皇は遺書が Lesigne に宛てられていると気付き妻に読むように云う。妻は法王の秘書聖アンブロジウスに手紙を渡す。 Ele regarda les clers de la contrée. A saint Ambroise a la cartre livrée. Cil ert evesque et canceliers saint Pére. Il list la letre; li autre l'escoutérent. Le non lor dist del pére et de la mére, Et ce celi que il ot espousée Et si lor dist de ques parens il ére: Et la moitié de l'anel ont trouvée Dedens la cartre trés bien envolepée, (...) "Sire", dist ele, "que l'm'aviés tant celée? Si les eusse rendues et moustrées." Grans fu li diex, a terre ciet pasmée. MとQはやや簡略に同じ筋を辿る。Qの伝承は次の如くである。

Dezploier la cuida et vout lire sa vie:

660 Mez le dous Jhesu Crist ne le consenti mie,

Car des mains l'apostole la laitre s'en yssy,

Ou sain a la pucele par devant tous saly

Qui trente er quatre ans out atendu son mary.

664 Tous ceus qui la estoient en furent esbahy.

Mez le dous Jhesu Crist le fist pour ensegnier

C'ordre de mariage fait forment a prizier,
Quant desus l'espousee fist la lestre lancier,
668 Sus pére ne sus mére ne la vout envoier.
Personne est bien chetive qui ront son mariage:
Dez lors renie Dieu et se met en l'hommage
Des anemis d'enfer qui tant sont plains de rage.

S写本以来、妻の胸に遺書が舞い込むこの奇蹟こそは、父母よりも人は妻と緊く結ばれている事を示すとされるのである。神の前に聖 Alexis と結ばれた妻は三十四年の貞節夫に捧げ臨終に際して話を交すことが出来、聖地からの棕櫚を墓に植えることを頼まれ、遺書を受ける特権に恵まれるのであり、夫に去られた妻ではなく、常に夫の信頼を託された妻なのである。僧侶の célibat を定める一方、結婚を神の創造に加わる人間の行為とし秘蹟として認めるカトリックに於ては、教会で結ばれた Alexis と Lesigne の関係のこの変化は必然的と云えよう。又、一方には十一世紀から十三世紀の間に女性の進展があったことも考慮しなければならない。

La belle Aude n'apparait dans le *Chanson de Roland* que pour mourir aussitoit de chagrin, aux pieds de Charlemagne (P. Le Gentil) と云われた「ロランの歌」の Alde も写本 V_4 では Vienne の Girard と馬にのって対話をし乍ら Blaye までロランと兄オリヴィエに対面に来て二人の死を知り、ベタニヤのラザロを甦えらせ給いし神に祈り、天使をしてオリヴィエの口から語らしめる。Li veras Deo sa polcella no oblie, Char li santi angles à sa voz estaudie: Oliver parlòe si cum il fust vie: (V_4, v. 5326-5328) その後、告悔僧に告白をしてから死ぬのであり Belle とのみ云われていた Aude を十三世紀末のパリ写本は描写して Mout fu bele Aude quant el fu conraee Tres grans clartez li est el vis montée; Soz ciel n'a rose qui tant soii couloree, Qui sa biautez n'ait toute trespassée (P. v. 5580-5384) と云いロランの遺体の前での Aude の plainte も長く続けられるように変る。武勲詩でも聖者伝でも女性は十一世紀を過ぎると蔭の人物ではなくなって来るが Lesigne はラテン語祖本の枠組と夫が聖者であると云う制約によって、かえって女性の

役割の変遷をはっきり表現していると思われるのである。

使用した参考文献

Gaston Paris & Léopold Pannier: *La Vie de Saint Alexis.* Paris 1872

J. M. Meunier: *La Vie de Saint Alexis.* Paris 1933

A. Amiaud: *La Légende Syriaque de St, Alexis. l'homme de Dieu.* Paris 1889

G. Rohlfs: *Sankt Alexius.* (Sammulung romanischer Ubungstexte) Tubingen 1958[3]

C. Storey: *La Vie de Saint Alexis* (Blackwell's French Texts) Oxford 1958

Walberg: *Contes Pieux en vers du XIVe siècle tirés du Recueil intitulé Lé Le Tombel de Chartrose,* Lund 1946

Raphaele Walzer: *Regula Sancti P, Benedicti.* Beuron 1929

Henri I, Marrou: Histoire de l' Education dans l'Antiquité. Paris 1965[6]

聖 Alexis 伝の引用はラテン語は Rohlfs 版、フランス語は Paris-Pannier 版によったが、十一世紀 (L. A. V 写本) のフランス語のみは Storey の Blackwell's 版によった。Chanson de Roland の引用は V 4 は G. G. Quierazza: *La Chanson de Roland nel testo assonanzato franco-italiano,* Torino 1952, P は R. Mortier: *Le Texte de Paris* 1947 によった。